

# 伝道上からみた佛教教理の臨床的考察

——北原敏直詩集『星への手紙』をふまえて——

皆川 広義

## 一 はじめに

佛教は、釈尊によつて示された人間の生死の苦惱からの解脱である。釈尊はそれを苦集滅道の四諦説として示してゐる。

苦諦は、私たち人間の存在は一生のうち楽しいこと苦しいことなど様々あるが、最後は死んで無になつてしまふのであり、すべての人々に深い生死の苦惱があるというのである。集諦は、その生死の苦惱が何により生まれるかというと、私たちの心の中にある我執という自分本位の行為にあるといふのである。滅諦は、生死の苦惱の原因である我執を滅して、個体としての我より大いなる生命としての仏により所を転依することによつて、悟りと安心が得られるというのである。道諦は、我執を滅する具体的な実践道として無我の行を示している。従つて、布施行も念佛行も不図作仏の坐禅行も、我

執を滅する無我の行でなければ仏行とはならないのである。

釈尊は苦集滅の三諦の教えを理解し、道諦に示した無我の行を実践することにより、生死の苦惱より解脱し、安心が得られると説示しているのである。

ところが現代ではこのことが人々に明確に自覚され、実践されていない。それが伝道なき今日の葬祭中心の佛教を存在させていると考えられる。しかし、現代でも釈尊の時代と同じく人間にとつて死はのり越えることのできない苦惱であり、すべての人間が一度は必ずこの深刻な問題に対しなければならないのである。

佛教は釈尊によつて印度で開教されて以来二千五百年にわたる歴史を有する宗教で、その伝来された国々により、また時代によつて様々な発展をしてきている。質的にも聖なる根本佛教より、世俗化された今日の佛教まで様々である。しかし、いかなる佛教も本来の機能である生死の苦惱から人々を

救済する嘗みを無くした場合、仏教とは呼べなくなるのではなかろうか。

その意味で、今日の葬祭仏教は仏教の原点に立つて深く反省をしなければならない問題をもつてゐる。

我が国の葬祭仏教は江戸時代に生まれて約四百年の歴史を持ちながら、寺檀制度に支えられて今だに大きな存在力を持つてゐる。また、葬祭仏教は寺檀制度によつて信者が固定的に確保されているので宗教としてのマーケットティングリサークツつまり、信者づくりをしなくても存在し得るという宗教としては特異なあり方をしている。このことが伝道を欠落しても宗教として存在するという今日の状態をつくり出しているのである。

今日の葬祭仏教は、その活動のほとんどが人間が死んでからの人々であり、仏教本来の機能である生死の苦悩から人々を救済する場を失つてしまつてゐる。

従つて私たちは、仏教が人間の生死の苦悩からの解脱道であるとする釈尊によつて示された教理を今日実証し得る場を持つていないのである。

現代の私たちは多くの仏教入門書によつて、その教理を理解し得ても、果してそれによつて本当に人々が生死の苦悩を解脱し、安心や生きがいを得ることが出来るのか信じ得ないのである。例えば理論的にガンの治療法が発見されたとして

も、その臨床例がないと私たちはその治療法を信じて治療をまかせられないのと同じようなことである。釈尊の時代であるならば、現に生きたあかしがあるからその示す教理通りに実践して悟りや安心を得られたであろうが、それに比して現代は人々の思想行動が大きく変化し、説示されているさまざまな宗教的実践を行うことも不可能になつてきてゐる。

現代において仏教伝道を開拓し、人々を生死の苦悩より救済して行こうとする立場にある者にとって、教理の臨床的考察は医学における臨床実験と同じようにも重要なことである。私たちは、仏教の教えに示された通りに信じ実践して悟りと安心が得られたという臨床的裏づけがないと、自信をもつて仏教の教えを広め、その示す宗教的実践により人生を救済することができないのである。

この度は、仏教とは直接関係はないが、進行性筋ジストロフィー症にかかる生死の苦悩に打ちひしがれながら、見事にその苦悩を身をもつて解脱した北原敏直君の詩集『星への手紙』<sup>(1)</sup>を通して、以下主体的に仏教々理の臨床的考察をしてゆきたい。

## 二 詩集『星への手紙』の著者・北原敏直

北原敏直君は昭和三十五年三月二十二日、東京の渋谷区で生まれた。四歳のころ歩き方がおかしくなり、五歳で幼稚園

に入り一年ほど通園したが、その時、東京女子医大で進行性筋ジストロフィー症と分かり、母親に連れられて通院治療を続けるようになる。

昭和四十一年四月に渋谷区立本町小学校に入学した。二年になつてからは病状が進んで家の人に送り迎えをしてもらわなくてはならなくなる。二年の終りになると通学が困難になつて家にいるようになり、これから七年にわたる苦しい闘病生活がはじまつた。五年のころになり、家に東京都の訪問教師が来て、一週二回の授業をしてくれるようになる。

昭和四十六年九月には、小学二年のかろより病室の空くのを待つていた千葉県にある国立下志津病院にやつと入院することが出来、同時に、そこに併設されている千葉県立四街道養護学校の小学部六年の病棟学級に転入することになった。

北原君は、この養護学校中学部一年になつたとき、担任の石田先生の指導により詩を書くようになる。石田先生は、北原君と初めて逢つたときの印象を「車椅子に乗つていて、青白い、どこか孤独で、淋しそうな少年で、話しかけても恥かしそうにして多くを語らなかつた」と述べている。当時、その頃の北原君は入院して六ヶ月ほどであり、病院生活に慣れてしまはず家族から離れた淋しさと友だちとの人間関係などで、何かといえど涙を流すことの多い毎日だった。

石田先生はいろいろな詩人の作品を印刷して配つてくれた

が、北原君は四国の仏教詩人・坂村真民さんの詩に感動し、詩を書こうと決心するようになる。

北原君は正規の小学校教育を受けていなかったために、はじめは読み書きも不自由であったが、深い感動から始まつた學習は、まるで乾いた海綿が水を吸うようにどんどん吸収していく。はじめのうちは、他の生徒と同じように詩とはいえないようななごく普通の作品を書いていたが、六ヶ月・一年とたつうちに石田先生も驚くような立派な、キラキラ光っているような詩を書きだした。そして詩作に対する喜びと自信が生まれてくると、当然のことながら北原君の性格や生活態度にも急激な変化が見られるようになつた。

この北原君の変化を石田先生は「一人の人間が素直さと意欲をもつて、内面を育てる栄養を採りながら、一筋に詩作に精進した場合の自己変革（自己開発と自己発見）は、まさに他に比べるものがないほど劇的ですばらしいものだと言わざるを得ません」と、述べている。この北原君の詩作活動を通しての生き生きとした自己変革は、目を見はるものがあつた。

こうして書きつけた四百篇を越える作品の中から百四十篇を選んで『星への手紙』という詩集が昭和四十九年十二月に刊行されたのである。

しかし、この詩集が出来上がつたころの北原君の病状は残

念ながらかなり進行しており、車椅子による訓練にしても、白くやせた細い手を車輪にあてて十メートルを三分もかかつて、移動させていた。このような肉体の衰えとは別に、いや反比例して心はますます輝きを増し、立派な詩を書いていた。いろいろな意欲も生まれアマチュア無線の資格などを取つたりした。

北原君はそれから一年後、高等部一年の昭和五十年の夏、十五歳の短い人生を詩作活動を通して生命を燃焼しきるようにして大らかに終えていった。

### 三 『星への手紙』にみられる解脱道

#### 1 死の恐怖をみつめる

『星への手紙』の著者、北原敏直君がかかった進行性筋ジストロフィーという病気は、現在でもその原因や治療法がまったく分かっていない難病である。この病気は男の子が多くかかり、ある種の遺伝性のものであることが分かっている。

大体、小学校に入るころの少年に発病し、まず足の筋肉が萎縮はじめ、次第に歩けなくなる。車椅子に乗るようになつても、やがて車を動かしていたその手も動かなくなる。そして、身体のすべての筋肉が動かなくなつて、十五、六歳位でほとんどの人が死んでしまうという恐しい病気である。

北原君はこの恐しい業病に四歳のときかかり、それから小

さな身心でこの恐しい病気と闘ってきたのである。中学一年の担任・石田先生が初めて逢つたときの彼は、その病気との闘いに刀折れ矢尽きてしまつたような状態であった。北原君のような少年には重すぎる病気であった。

病に倒れた少年達は、現代の高度に進んだ医学が真剣に取りくんでくれないで見捨ててしまつた難病に、不満をいふすべも知らないでじつと堪えて黙つてしているのである。なんとこの少年達にとって不条理な病であろう。少年達がこの病気を呪つて何をしようと私たちは少年達を責めることはできない。ところが少年達は呪いの言葉もはげずに小さな心でこの業病をじつと堪えているのである。

その上、同じ病をもつた者同志の養護学校での生活は、知り合つて心の友となつた学友を一ヶ月に一人位づつ失いながらの闘病生活である。彼らは、夜寝られないような死の恐怖や底なしの谷に吸いこまれるような不安に絶えずおそわれるのである。

しかし、このような死の恐怖のなかで北原君は静かに死をみつめながら、詩を書きはじめたのである。

死  
死は暗い暗い

夜のようだ

けものが目を

光らせるように

追つてくるようだ

死は寒い寒い

冬のような

つめたい風が

骨につらぬくよう

しみてくるようだ

死は悲しい

別れをつけさせるのです

なにかをしよう

死はみんなこわいという

でも時は刻々とすぎてゆく

生きている今だけでも

自然を見て時をすぎるのを忘れよう

そうだ一分一秒この瞬間

なにかをしよう

生きている証しに時を忘れるために  
最後まで死のこわさを忘れていよう

消えてゆくもの

ふりむいてはならない

なんといわれても

くるしくても

くろいかげに

応じてはいけない

消えてゆくものに

こだわってはならない

一日一日明るく生きよう

そのために消えてゆくものには

見むきもせず祈つていよう

夜の静けさの中で

だれもいない夜の静けさの中で

僕は考えてみたい

生命について

この僕の生命は

どのくらいあるだろう

あすまでか その次の日までか

こんなことを考えていると

きゅうにぶるつと

体があるえる

これらの詩は、前に死の恐怖に打ちのめされていたときよりは、それを言葉を通して客観的に凝視できるようになつておらず、それだけ彼に生きる力が芽ばえてきていることを物語っている。しかし、この病気にかかつたら十五、六歳で死ぬことを知つてはいる少年にとって、死はやはりこわいのである。夜の静けさの中で、自分の生命の終りを思うときゆうに体がぶるっとあるえてしまうのである。そして、必死になつて死を忘れようとして、ふりむいてはならない、なにかをしよう、自然をみつめようとするのである。こんな身体の不自由と苦痛をともなつて確実にジリジリと近づいてくる死の恐怖は、大人でも耐えられないものである。

ただ、仏教の立場から大切なことは、このような死の恐怖は北原君たちだけのものでないということである。すべての人間がこのような死の恐怖にいつか逢わざるをえないのである。ただ、現在の私たちは平和で、健康に恵まれて いるので、死の恐怖を柵あげしておられるだけである。これが四諦説の苦諦で説示している人間の真実のありようである。詩人の相田みつをさんは、このすべての人間が持つて いる死の恐怖を「うれい<sup>(2)</sup>」と呼んで、次のような詩を書いている。

うれい

むかしの人の詩にありました

君看よ 双眼の色

語らざれば憂い無きに似たり  
憂い……が無いのではありません

悲しみ……が無いのではありません  
語らないだけなんです

語れないほど深い憂い……だからです  
語れないほど重い悲しみ……だからです  
人にいくら説明したって

全くわかつてもらえないから  
語ることをやめて  
じつとこらえているんです

文字にもことばにも

到底表わせない  
深い憂い……を

重い悲しみ……を

心の底深く ずつしりと沈めて  
じつと黙つて いるから

眼（まなこ）が澄んでくるのです  
澄んだ眼の底にある  
深い憂いのわかる人間になろう  
重い悲しみの見える眼を持とう

君看よ 双眼の色

語らざれば 豪い無きに似たり  
語らざれば 豪い無きに似たり

## 2 死の凝視より生命の実感へ

北原君は、死の恐怖を忘れるため自然をみつめた。自然是そのような彼の前に、美しい姿を見せ、心身の劳れを癒してくれた。

病める仲間でも

うれしいときはよろこび

笑顔をうかべる

そうだ 生きているんだ

こんなからだでも

よろこびが笑顔があつたんだ

生きているんだ

この一日きょうも

自然はみやくうつ

野のかたわらでは花がさき

朝の光の中ではせみが生まれる

そうだ生きているんだ

空が 大地が 地球が

そして ぼくも

よろこび

病氣で動けなくとも

よろこびはあつた

生きているよろこびが  
人間としてのよろこびが

そして、彼は死の恐怖にうらうちされて自分が生きているということを、新鮮に実感するようになる。そしてその感動は自分ばかりでなく、空が、大地が、地球がというように大いなる生命の自覚へと展開している。一本のくもの糸にも大生命のひびきを感じたり、ごみ箱に捨てられたモミジの種子に「こんなに小さいのに木になる。自然ってすごいなあと、感動するのである。

一糸のくもの糸

一本のくもの糸が

夕日をあびて光っていた

赤くやさしく慈悲ぶかく

天国のくもの糸のように

いま暗くなりかけている世界に  
一條の光をふりまいている

その自然の美しさ

一本のくもの糸にも

大生命のひびきが

いっぱいにある

つぶやき

車いすのぼくは

ごみ箱の中を見ていた

それは枯れたモミジ

朝すてられた木の枝

その木には

たねがついている

ああ そうだ

たねを五六つぶ

とつてみた

「こんな小さいのに

木になる

自然つてすごいなあ」

それはぼくの言葉

車いすのぼくの言葉

彼は死の恐怖をじっと凝視することにより眞実の生にめざ

め、大いなる生命のなかの自己を自覚するのである。道元禪師が『正法眼藏弁道話』で示している「遍法界みな仏印となり、尽虚空ことごとく悟りとなる」という風光に、彼は立っているようである。

そんな心境の彼を再び、死の恐怖の谷底にひきづり込ませるようなことが起る。やつと心の通じ合えるようになった学友の死である。また勇気がほしいと願い、もう一いきと歯を食いしばらざるを得なくなるのである。

思い出

ほらほら

空が泣いている

今日はわかれの日だ

ああ長かったなあ

さくらの咲くころから

春夏秋冬と

ともに悲しみ

ともに笑った

なにげなかつた

なにげなかつた

ほらほら

空が泣いている

いまこそいまこそ

ありがとう

さようなら

ああ長かった

今日は――

わかれの日だ

もう一いき

たりないところがある

もう一いき

これをこえなければ

ぼくは自分を生かせない

勇気がほしい

勇気がほしい

死をこわがらない

勇気がほしい

この一日一日

生きていけば

人間だから死は

いつかはくるだろう

それはいつくるかわからない

勇気がほしい

勇気がほしい

もう一いき

わかっているのだが

わかっているのだが

花のよう

花のよう

3 生命を自覚した明晰な眼で

北原君の眼に自然がみずみずしく美しいのは、彼が「未期の眼」といわれる眼を持っているからだと、紀野一義さんは語っている。「未期の眼」ということをいいだしたのは芥川龍之助で、彼は自殺する直前に「自然の美しいのは、僕の未期の眼に映るからである」と語っている。死を覚悟した人間の眼を「未期の眼」と呼び、そういう眼でみると今迄の風光と異った自然が見えてくるのである。それは仏教で説く般若の智に展開して行く明晰な眼である。

彼はこの明晰な眼で、自己とそれをとりまく世界を次々にみつめて行くのである。

まかせて生きる

生まれるも

死ぬも

思わず

生きてゆけたら

どんなにいいだろう

いま花を見ながら

そうなるうと

強くなろうと

小さな祈りを

ささげます

### 泣く地球

地球は泣いています

ほらこのあいだの雨

しおっぱりありませんでしたか

あの大きなおなかをかかえ

痛い痛いと泣くんです

げんばくというがんが

おなかのなかではれつするんです

もうやめないと

白眼球がへってしまう

地球の血がにごつてしまふ

地球は泣いています

泣いているんです

この詩は、四諦説の集諦と滅諦の説示にあたるものである。自己に対する執着があるから苦悩が生まれるのであり、したがつて、執着のない生活は安らかな世界である。彼は花のようにしてをまかせて生きる無私的心になれたらどんなにいいだろうと思うのである。石田先生は、北原君たちに「世界ぜんたいが幸福にならないうちは個人の幸福はあり得ない」いう宮沢賢治の言葉を語り、このことを話合つてきた。

このことは、自分がだけの幸福を考えるのは我執であり、それが生死の苦悩の原因であるとし、それを捨てる無我行によ

つて悟りと安心が生まれるとする仏教の教理にかなつた実践である。先生はそのため少年達に自分達の病気だけを考えようなことはせず、広く社会の問題へも興味や関心をもつよう絶えず働きかけてきた。

北原君は、核戦争の危機や公害問題や世界の食糧危機などに、深い関心をもつようになり、自己をとりまく世界をみつめた詩をいくつか書いている。

この詩は維摩の説く衆生病む故にわれ病むという精神で書かれており、生命を自覚した明晰な眼が智より悲へ展開し、般若の智になっていることを示している。もう仏の眼たる自己一如の眼である。

最高のお礼  
歩きたいんだ緑の中を  
一人林にたたずみたいんだ  
君たちに歩けないことの悲しさを教えたい  
現代人に歩くことの尊さを教えたい  
病気という重い宿命をせおつた  
ぼくにはそれしかできないから  
平和がほしいんだ  
ステレオなんかいらない  
たとえ病氣が治らなくとも  
平和がくればそれでいいんだ  
平和を忘れた人に平和を教えたい  
ぼくたちにつくしてくれる人への  
最高のお礼のつもりで  
ぼくは詩を書き  
平和を祈る

肉体はなくなつても  
肉体はなくなつても  
ぼくは生きている  
三次元をこえて  
高次元のはて  
宇宙の根源と化す  
ぼくは死ぬのではない  
肉体をするのだ  
服をぬぐように  
肉体をはなれても  
ぼくはあらゆるものに生きる  
自然のいぶきと化し  
足もとの砂にも  
満ちている空氣にも生きている  
そうでありたい  
死をこえなにものにも生きる  
そうでありたいため祈り  
体をなげだしても悔いない

尊い生命が大らかに生きていくためには、まず、第一条件として平和がなくてはいけない。自からの難病との闘いを通して平和の必要を訴えている。

そうでありたい  
そうでありたいため祈ろう

短い人生だから

憎みあっても人生

悲しみにおぼれても人生  
おなじ人生なら

明るくいこうよ

小さな人間ひとりひとり

短い一生なんだから  
仲よくしようよ

泣いてばかりいないで

空の星を見ようよ

星はけんかしているかい  
泣いているかい

おなじ人生なら

光っていよいよ星のように

地球を愛し生きようよ

憎みあっても人生

悲しみにおぼれても人生  
短い命なんだから

仏教の安心は、個体としての私たちに依り所をおくのでなくして、過去から現在、現在から未来へ流れている種として

の大きいなる生命に依り所を転依することによって生まれる。

個体としての生命は生まれ死んでゆくが、私たち個体に流れてきた生命は、地球上に生命が誕生してから今日までずっと親から子へと伝承されて生きつづけてきたものであり、また、私たちの子孫に永遠に流れていく大いなる生命である。

北原君の「ぼくは死ぬのではない肉体をするのだ服をぬぐように。肉体をはなれてもぼくはあらゆるものに生きる」という言葉は、個体としての生命より大いなる生命への転依がみられ、仏教の安心の究極を語っているように考えられる。

次に、進行性筋ジストロフィーという業病にとりつかれた少年にとって、自分の病だけで精一杯であろうと考えられるに、それをのり越えた強烈な慈悲心の発露に驚かされる。

わけてあげよう

よろこびを感じたら

ほかの人にも

わけてあげよう

人生なんて短いから

自分なんて点のようだから

一人でも多く  
よろこばしてあげよう  
わけてあげよう

ちりのような  
もつともつと

空気の分子のような  
小さなよろこびを  
一人一人に

わけてあげよう

ああ早くしないと

人生がつきてしまう  
点のような自分が

けしゴムでけすように  
きえてしまふ

今感じてるよろこびも  
むだにはできない

どうして点のような生命しか持ち得ない不遇な、そして点

のようなよろこびしか持ち得ない不幸な少年が「よろこびを感じたらほかの人にもわけてあげよう」などと、暖い心を持つことができるのだろう。いや、人間は本来このような暖い心を皆持っているのである。ただ、それを現代の私たちは見

失っているのである。それを北原君は、死の恐怖をじつと見つめることによって発見し、実証してくれているのであると、信じざるを得ない。

この身を

万人のくるしみを  
ぼくがすぐえるのなら

こんな病氣にほろぼされてもかまわない  
この地球がほろびてしまうのは

死ぬよりつらい

長い歴史をとおして

人々が築いてきたこの大地が  
なくなってしまうなんて  
そんなひどいことはたくさんだ

ぼくを見てくれ

病魔にむしばまれた  
この体はみにくいか

それでいいんだ

だからこの地球まで  
みにくくしないでくれ  
万人のくるしみを  
ぼくがすぐえるのなら

よろこんでこの身を  
人々の前にさらそう

### 詩にささげる

詩にささげようこのからだを  
こわれた機械のようなこのからだ

一生ささげよう命つきるまで

書いて書いて手がくさるほど書いて  
詩はぼくの生きがいぼくの命  
ぼくの心だ最大の力だ

### 4 よろこびの詩

ロボロにされた少年がこんな強烈な暖い利他的心を持つていることに深い思いをせねばならない。こんな立派な心をもつた少年が、十五、六歳で死んでしまうのである。この暖い心を仏教では仏の生命と呼ぶのであらう。そしてこの仏の生命が彼を死の恐怖や病苦に耐えさせ、その上に大らかな生きるよろこびをつくり出したのである。

死の恐怖に苦悩し、病苦に打ちのめされた北原君は、自分の生命の燃焼し終る前にすばらしい法樂の境に生きることが出来た。

### 青空と笑顔と草木

青空がすき笑顔がすき草木がすき  
ぼくの心には

青空のような自由と

笑顔のような明るさと

草木のような楽しさが  
みちあふれていく

青空がすき笑顔がすき草木がすき  
青空には命がみちあふれ

笑顔には平和がみちあふれ  
草木には神の愛がみちあふれている

病氣にボロボロにされた少年に、どうしてこんな強烈なバイタリティーが生まれてくるのか不思議に思う。この詩を書いている頃の北原君はもう手で鉛筆を持って書くことが出来ず、手に鉛筆をヒモでしばりつけ、歯でくわえて、一字一字渾身の力をふりしぼって書いているのである。北原君が亡くなつてからそのヒモをほどくと人指ゆびと親ゆびは歯によつて、肉が切れこまつ黒な骨が出ていたといふことである。私たちはただただ人間のもつてゐる慈悲の強烈なバイタリティーに驚かざるを得ないのである。

一国の総理大臣が自分の利益のために政治をしている時代に、現代の医学でさえ見捨てた難病にとりつかれ、肉体をボ

青空がすき笑顔がすき草木がすき

ぼくは青空と笑顔と

草木がすきなのです

そこにはぼくの心が生きているのです

### 夕ぐれ

あつい一日の日がくれる

風が松の木をゆらしている

涼しい空気は鳥たちが一日を

終えるなき声をのせる

赤くそまつた雲には

母を感じさせる

人が一日生きるために

空気 水 日光

自然すべての力が働いているんだと

思いだしたように心でいっていた

暗くなる外 風にゆれる松の木

あしたもよろしくと

鳥のように祈つてみた

### 見えるものすべてが

今は昼時でとても静かだ

時々コオロギのなき声が

外からきこえている

空からは静かな光りが

ふりそいでいる

草木はこの光をすつているのだろう

青く光るあの葉そこの葉

君たちはとても美しい

よく見ればへやのかべもてんじょうも

見えるものすべてが光をすつている

その美しさ明るさ

それに見とれている自分も

いま光をすいながら

ノートに詩を書いている

なんという美しさだろう

そして、彼の死は近親者の語るところによると、まさにアヌルッダによつてうたわれた次の釈尊の臨終に比すべきものであった。

### 心やすらげき救済者は、

いまや入る息も出る息もない。

欲なき者は寂靜にいたり、

いま覚者は滅したもうた。  
ゆるぎなき心をもちて、

よく苦痛にたえたまい、

ともし火の消ゆるがごとく、  
心の解脱をとげたもうた。

#### 四 結 び

詩集『星への手紙』は、進行性筋ジストロフィーという現代医学も見捨てて、いる難病にとりつかれた少年が、死の恐怖と病苦に打ちのめされながら真剣に病魔と闘つてきた魂の記録である。そこには少年の作品にみられるような甘さもなく單なる観念もない。また、彼が想像を絶する恐怖の中では、ほとんど不平・不満や泣きごとをいわないことは、けなげとしかいいうがない。

北原君の生死の苦悩からの解脱道は、病氣がもたらした死

の恐怖や病苦との闘いによりはじまつた。最初の死の恐怖をみつめた詩にその闘いのすさまじさや苦悩から解脱したいといふ強烈な願いを感じることができる。

次に、死の恐怖から生まれた解脱への願いは旺盛な学習欲を生み、死をみつめることにより生にめざめ、さらに眞実の生命のすばらしい風光を発見するのである。

石田先生の指導で、生命の実相を自覚した明晰な眼は、次

に自己】をとりまく世界をみつめさせられる。それによつて花のようにして、をまかせて生きる無私の安らぎを発見したり、地球が原爆や公害で泣いていると自他一如の慈悲心を示すようになる。さらに慈悲の心は、身をけげるような思いで一字一字を書く詩作へのすさまじい行動となつて現われる。どうして病によって身体をボロボロにされた少年が、核や公害から地球を守り人類を守るため、この身をささげてもよいというような利他の愛を持つようになるのか不思議である。

また、小学校教育を正規に受けていなかつた少年が、二・三年でこんなすばらしい詩をどうして書くことができるようになったのか、今日の学校教育のあり方を深く反省せられる。それは、無常觀により求道心が生まれるとする仏教の教育理念がそこに実践せられていて、このような驚くべき成果が生まれたものと考えられる。

最後の生きるよろこびをうたつた詩は、人間の尊貴性を美しく私たちに示している。

以上、詩集『星への手紙』の考察を通して、北原君が仏教教理が示すような実践することによつてみごとに生死の苦悩から解脱し、安心と生きがいを成就していることがわかる。

現代の私たちは、二千五百年前に釈尊が歩んだ道はなかな

か歩みにくいが、私たちと同じ時代に、私たちよりもめぐまれぬ身体をもって切り開き歩んだ北原君の道は、幸いなことに歩むことができる。

註 (1) 『星への手紙』北原敏直著 新書館

(2) 『円融便り』昭和51・7・1号 栃木県足利市八幡町一の

三八七 円融会

(3) 『あすあす』第十二号「私の愛するさすらいびと」紀野一  
義稿

(4) 『或る旧友への手紙』芥川竜之助著 新潮社